第二十二回ふくふく童話大賞　「大賞」

「けんたの冒険」

明日から待ちに待った夏休みだというのに、終業式の帰り道、クラスの番長をしているマンモスにつかまり、雨降りの中、マンモスとその子分格のシンスケのカバンを持たされて、ぼくはずぶぬれで帰ってきた。

三年生までいじめられたことなどなかったのに、四年生になってからマンモスや、今まで仲良しだったシンスケまでいっしょになってぼくにいじわるするようになったんだ。

お母さんは、ぼくのありさまを見て（今日もいじめられたのね）ためいきをつきつつ言う。

「けんた、かぜをひかないうちにお風呂に入りなさい」

ぼくはシャワーの後、自分の部屋で雨の音を聞きながらお父さんのことを思い出していた。

お父さんは、ぼくが幼稚園に上がる前に、事故で死んじゃったんだ。お父さんは、おとなしくて絵ばかりかいているぼくを見て、「この子が小学生になったら、海や山に連れて行って、たくましい子にするんだ」とはりきっていたそうだ。

お父さんが生きていたころはよく、ふとんの中でそうなんごっこをしてくれて、とても楽しかった。

お父さんが「あらしの音がするよ」と言ってぼくの耳を両手でふさいで、少しずつ手を開いたり閉じたりすると、本当にあらしの音が聞こえてきたんだ。ぼくは不思議に思い、ふとんからかおをだすのだけれど、いつもの部屋の中だ。

それからいろんな話もした。ぼくが夢見る世界は、ジュースの川が流れていて、木や葉っぱはチョコレートやピザでできていて、平たい石はステーキだ。さまざまなお寿司も咲いているし、カレーでいっぱいの沼もある。

お父さんは笑いながら「お父さんは蛇口をひねるとビールが出てくる水道がいいな」と言っていた。

お母さんが、いひんの整理をしていたら「宝物」って書かれた箱があって、開けてみたらそれまでぼくがかいた絵や保育園で作ったお面とかが入っていたそうだ。ぼくはお父さんが大好きだったけど、お父さんはぼくのことがもっと好きだったんだ。

夏休みの一日目は水曜日だったけど、(仕事が休みということで)タカおじさんが釣りに連れて行ってくれた。前からぼくに釣りを教えてくれるって約束していたんだ。

タカおじさんはお父さんの弟で、若いしなんでも上手でかっこいい。

海に着いて、さっそくエサのつけ方を教えてもらった。ところが、このエサというのがとっても気持ち悪い「虫」なんだ。

この虫は「ゴカイ」といって、海岸での釣りにはこれが一番いいとタカおじさんは言う。

おそるおそる一匹つまむと、激しくあばれる。しかも口のところがクワッとさけ、そこからのぞいた二本の牙で指にかみつこうとする。

タカおじさんが手本を示してくれたけれども、なれるまでけっこう時間がかかった。でも、やがて、さおの投げ方も少しサマになったし、大物は釣れなかったけど、ユダヤーガーラ（セイタカヒイラギ）という平たくて銀色に光った手のひらくらいのものがけっこう釣れた。

ただ、この魚はよだれまみれで、しかも「げこげこ」と鳴くのでちょっといやだった。それでもぼくは釣りが面白くて大好きになった。

家に帰ると、釣った魚をお母さんが素揚げにしてくれた。塩だけの味付けだけど、パリパリしてとてもおいしかった。タカおじさんもビールによく合うとごきげんだったよ。

「夏休みの間に釣り名人にしてやるからな」とタカおじさんが休みの日は毎週釣りに連れて行ってくれると約束してくれた。

あくる日、ぼくは、お母さんが仕事に出たのを見はからって、釣りじたくをし、きの

うと同じ海岸にやってきた。タカおじさんにもお母さんにも、あぶないからひとりで釣りに行ってはいけないと言われていたんだけど、釣りがしたくてがまんできなかったんだ。

でも、この日はいつまでたってもさおに何のはんのうもなかった。

しばらくすると地面に置いてあったエサを入れたビニール袋の方から、かすかに「チチッ」という鳴き声が聞こえた。気になってエサ袋に手を入れて中をさぐってみると、あれだけくねくねしていたゴカイが一匹もいない。袋を持ち上げてみると底に穴があいている。

「ネズミのしわざだ」

せっかくの楽しみをネズミにだいなしにされ、頭にきたぼくは、とっさにおもいついたことを行動に移した。リールをまきとって、まだエサがついているのを確認するとネズミのいる穴へ釣り糸をたらしたんだ。

まさかとは思ったけど、まもなくしてさおが引っ張られてしなった。しんちょうにリ

ールをまいていくと、くるくるとあばれまわりながらネズミが出てきた。頭にきてやったこととはいえ、こんなにうまくいくとは思ってなかったのでぼくはめんくらってしまった。

ネズミは助けたいけど、手でつかんで針を外すことなどできるわけもなく、どうしていいのかわからず、そのまま海になげ入れた。

しばらくの間、とほうにくれているとネズミが海面にかおを出すのが見えた。そのしゅんかんだった。大きく水しぶきがあがったかと思う間もなく、ものすごい力が持っていたさおにかかってきた。

さおをにぎってふんばっているのがやっとだった。ネズミを飲みこんだ「何か」は右に左にすごい速さで動き回っている。

この海岸には昔大きな船がとまっていたそうだ。その船の通り道を深く掘ってあるので、沖から時々サメや巨大なガーラ（ロウニンアジ）がくることがあるとタカおじさんが言っていた。

（ガーラかそれともでかいウツボか、まさかとてつもない大きさのゴカイ？そんなのがこっちに向かってきたらどうしよう）などとパニックにみまわれながら必死だったけど、とうとう海中にひきずりこまれてしまった。

海の中で目を開けてみるとぼくを引っ張っていたのはクジラだった。でも不思議とこわくなかったよ。むしろ、なつかしい感じすらしたんだ。船の道を通ってどんどん沖に出て、サンゴもいない深い海の底までくるとクジラは「そこに入りなさい」と言った。見ると目の前にはどうくつがある。そこをくぐると、だしぬけに広い場所に出た。

おどろいたことに、昔お父さんと夢見ていた場所だ。ぼくはすっかりうれしくなり、ジュースの川でおよいだり、ゼリーやプリンの池に飛び込んだりして遊んだ。川が合流しているところはミックスジュースになっていて、そのおいしいこと。

むちゅうで遊んでいると、「けんた君、そろそろ帰ろう」とクジラの声がきこえてきた。

帰りはあおむけになったクジラのむなびれにのって、海面をゆるゆるとたゆたってい

た。あのネズミもいっしょにね。

そしてぼくは近くを通る漁船に引き上げられたのだけど、そのとき事件が起こった。ぼくがクジラにおそわれているとかんちがいしたのか、漁師さんがクジラをモリでさしてしまったのだ。「ちがうんだ、やめてーっ」ぼくは必死になってさけんでいた。

しばらくすると、「おい、大丈夫か」という声が聞こえてきた。ひとつまばたきすると、青空の中にマンモスたちの顔が見えた。

マンモスは「おまえ、すげぇ大物を釣り上げるとこだったのにおしかったな」などと言っている。

マンモスたちは、いちぶしじゅうを見ていたらしいんだ。ぼくが大物とこんくらべをしているうちにとつぜん、釣り糸が切れ、そのはずみで後ろにひっくり返り、気を失っていたのだと言う。

その時、ぼくは目を覚ましたばかりでコーフンしていたから、勇気を出してマンモスたちに問いただした。

「どうしてぼくをいじめるの」
するとマンモスがすごんで言った。
「かげでこそこそとひとの悪口を言うからに決まってんだろ」
「え、なんのこと」
そばでしばらくモジモジしていたシンスケが急に「けんちゃん、ごめんっ」と言ってきた。
「どういうこと」
聞いてみると、絵をかくのがとくいなシンスケが、一学期の写生大会で入選できなかったのに、ぼくが優秀賞をとったのがくやしくて、マンモスに「けんたが君の悪口を言っている」とうそをついて、いっしょになっていじめだしたのだと言う。……その時だった。
マンモスがいきなり、バシーンとシンスケのせなかをたたいた。そして、「けんた、おまえも一発たたけ」と言う。ぼくははじめしりごみしたけど、体も大きく、力も強

いマンモスがこわいので言うとおりにした。次にマンモスはぼくの方にせなかを向けて「おれのせなかも思い切りひっぱたけ」と言う。やはりあとがこわいので言うとおりにした。

「よし、これでうらみっこなしだぞ」と笑った。そして、「けんた、おれたちにも釣りをおしえてくれよ」と言ってかたを組んできた。

その日をさかいに、ぼくはマンモスたちと仲良くなった。きっとお父さんがクジラに姿をかえて、ぼくとマンモスたちをつなげてくれたんだ。

シンスケとも仲直りできたし、マンモスとも仲良くなれて、楽しい夏休みになりそうだ。ぼくは、うれしくてゆかいな気分だ。

三人連れだって家に帰ろうとした時、夕日でほてったぼくたちの顔を海からの風がやさしくなでていった。

（山川　直壮）